

兄弟抄

此の法門を申すには必ず魔出来すべし。魔競はずば正法と知るべからず。第五の巻に云はく「行解既に勤めぬれば三障四魔紛然として競ひ起こる、乃至随ふべからず畏るべからず。之に随へば将に人をして惡道に向かはしむ、之を畏れば正法を修することを妨ぐ」等云云。此の釈は日蓮が身に当たるのみならず、門家の明鏡なり。謹んで習ひ伝へて未來の資糧とせよ。（御書 986 頁）

【通釈】

この法門を申すならば、必ず魔が起こってくる。魔が競わなければ、正法と知ることはできない。（摩訶止観）第五の巻に「行と解に勤めると、三障四魔が入り混じって競い起こる。乃至、随ってはならない、畏れてもならない。これに随えば、人を惡道に向かわせることになる、これを畏れば正法を修することを妨げる」等とある。この釈は、日蓮の身に当たるのみならず、門家の明鏡である。謹んで習い伝え、未來の資糧としなさい。

【主な語句の解説】

・行解

→行とは修行、解とは了解し悟ること。

・三障

→仏道修行を妨げる三種の障害のこと。

① 煩惱障—貪瞋癡等の煩惱による障り。

② 業障—五逆・十惡などの業により起こる障りのことで、妻子などの身近な人による妨げとなって現れる。

③ 報障—過去の惡業の報いによる障りのことで、権力者や父母などによる妨げとなって現れる。

・四魔

→仏道修行の障害となる四つの魔。

① 煩惱魔—貪瞋癡等の煩惱をもって身心を悩ます魔。

② 陰魔—五陰（色・受・想・行・識）により仏道に障害を起こす魔。

③ 死魔—修行者自身の死による修行の中断や、修行者の死によって他の者に疑いを起こさせる魔。

④ 天子魔—仏道成就を妨害して精気を奪い、それを楽しみとする他化自在天、すなわち第六天の魔王のこと。

【背景と大意】

本抄は、建治 2（1276）年 4 月、日蓮大聖人五十五歳の御時、お住まいであった身延から、武蔵国池上に住する池上宗仲・宗長兄弟に与えられたものです。兄の宗仲は、大聖人が立宗宣言されてより 3 年後の康元元（建長 8・1256）年に、四条金吾や工藤吉隆等と共に大聖人の教えに帰依しています。弟の宗長は、兄の勧めによって入信したものと考えられます。ところが父康光は、極楽寺良観の熱心な信者であったために、宗仲・宗長兄弟の法華信仰に猛反対でした。こうした中、大聖人は「魔競はずば正法と知るべからず」と、一連の試練は正しい信心ゆえの魔の働きであると仰せられ、兄弟および妻達が心をつにして異体同心の信心を貫き通すよう御教示されています。

【参考御書並御指南】

『最蓮房御返事』

「第六天の魔王我が身に入らんとするに、兼ねての用心深ければ身によせつけず」 (御書 585)

『兵衛志殿御返事』

「必ず三障四魔と申す障りいできたれば、賢者はよろこび、愚者は退くこれなり」 (同 1184)

日如上人御指南

あらゆる障魔は、正しい仏法の教えを守り、幸せを築こうとすると、影が身に添うように、紛然として競い起こってきます。魔の力は強く、その影響力から逃れることは大変であります。しかし、この魔との戦いのなかにこそ、仏法の修行の要諦があり、しっかりと題目を唱え、正法広布に身を捧げ進んでいけば、魔を魔と見破り、未来を明るく開いていくことが必ずできるのであります。しかし、魔は私どもの信心が惰性に流れてくると、必ずそこに乗じてきます。それが魔の魔たる所以であります。魔に負けない、たくましい信心を築くためには、月々日々に題目を唱え、折伏を行じ、自行化他の信心を強めていくことが肝要であります。惰性に押し流されて、魔に付け入られるのではなく「**魔競はずば正法と知るべからず**」と仰せのように、むしろ障魔を呼び起こし、それを信心の成長のバネとしていくことが大事なのです。所詮、信心とは障魔との戦いであります。障魔が出現した時、成長のチャンスであると確信し、喜び勇んで勤行・唱題、折伏に一層励み、決然として障魔を粉碎し、堂々と勝利の道を歩んでいくよう心から願うものであります。 (大日蓮・平成27年10月号)